

第 I 期

欧米へのキャッチアップが至上命題だった時期

1868：幕末から明治維新 — 1904：日露戦争

近代日本の礎石となる 人材育成の仕組みをつくった社会リーダー

もり あり のり ふく ざわ ゆ きち
森 有 礼 と 福 沢 諭 吉

Arinori Mori
1847 - 1889



公的立場から学制改革を実行

Yukichi Fukuzawa
1835 - 1901



日本初の私立総合大学 慶応義塾の創設

この時代は明治維新を挟んだ日本近代最大の動乱期である。江戸幕府が奉じる一国平和主義が崩れ、新たなリーダーたちが欧米列強に比肩できる近代国家へ、日本をつくり変えようと模索を続けた時代であった。森と福沢はどちらも自らが優れた社会リーダーであるとともに、新たな社会リーダー創出システムを構築した。それがこの期を代表する社会リーダーとしてこの2人を取り上げる理由である。

森は初代文部大臣として、帝国大学令、中学校令、小学校令、師範学校令を公布して学制改革を行った。東京大学を頂点とした近代学校制度のいわば創始者である。一方の福沢は日本初の私立学校、慶応義塾を創設するとともに、『学問のすすめ』はじめ、多くの啓蒙書を執筆し、実学と自立的精神の重要性を説いた。いわば官職からの国民教化を図った森に対して、民間からのそれを企図したのが福沢であった。

国民教化の最終目的として、日本の将来を担う社会リーダーの育成が2人の頭の中にあっただのは間違いない。ここでは、その森と福沢の経歴を、時に交錯させながら辿^{たど}ってみたい。

参考・引用文献に関しては各期ごとの終わりにまとめて掲げる

国や藩の枠を超えた広い視野を持ち、 新たなものを認め、 積極的に学ぼうとした2人

もり ありのり
森有礼の前半生



Arinori Mori

- 1847 [弘化4] 1歳 7月13日、藩士、森有恕の五男として薩摩の鹿児島城下に生まれる
- 1858 [安政5] 12歳 藩校、造士館に入学する
- 1860 [万延元] 14歳 林子平『海国兵談』を読み、洋学を志す
- 1861 [文久元] 15歳 藩英学者、上野景範の塾に入り、英学を学ぶ
- 1864 [元治元] 18歳 夏、藩の洋学校、開成所に入学し英語専修生となる
- 1865 [慶應元] 19歳 1月18日、藩の英国留学生に選抜される
3月22日、英船オースタライエン号に乗船し、羽鳥沖を出帆する
5月28日、英国サウサンプトンに入港、同夜ロンドンに到着する
8月中旬、ロンドン大学ユニヴァーシティカレッジの法文学部に聴講生として入学する
- 1866 [慶應2] 20歳 6月21日、留学生仲間とロシア旅行に出発する
8月2日、ロンドンに到着する
- 1867 [慶應3] 21歳 3月上旬、米国の宗教家トーマス＝レイク＝ハリスがロンドンに来る
4月8日、留学生仲間とスコットランドにいたハリスを訪ねる
7月上旬、留学生仲間とともにロンドンを出発し、米国にあるハリスのコロニーに入る
- 1868 [明治元] 22歳 コロニーで牛の世話、靴磨き、料理、血洗いなどの労働に従事する
4月17日、ハリスの勧告により、帰国を決意、帰途につく
6月、日本に帰国、徴士外国官権判事に任じられる

※ 年齢は、数え年で表記しています

ふくざわ ゆきち
福沢諭吉の前半生



Yukichi Fukuzawa

- 1835 [天保5] 1歳 1月10日、大坂の中津藩倉屋敷にて、藩士、福沢百助の次男として誕生
- 1836 [天保7] 3歳 父、百助が死去。母子6人で中津に帰る
- 1847 [弘化4] 14歳 漢学を学び始め、たちまち上達する
- 1854 [安政元] 21歳 2月、兄、三之助のすすめで蘭学の習得を志し、一緒に長崎に向かう
- 1855 [安政2] 22歳 3月9日、大坂で緒方洪庵の適塾に入門
- 1857 [安政4] 24歳 適塾の塾長になる
- 1858 [安政5] 25歳 10月中旬、藩の命を受け、江戸に出て築地鉄砲洲にあった藩主、奥平家の中屋敷に蘭学塾を開く。これが後に慶應義塾に発展する
- 1859 [安政6] 26歳 開港場の横浜を見物、蘭学から英学への転向を決意、独力で習得する
- 1860 [万延元] 27歳 2月4日に品川沖を出帆、太平洋を横断
2月25日にサンフランシスコに着く。サンフランシスコとその付近に計50日あまり滞在
5月5日、帰国。幕府に翻訳方として雇われる
8月、最初の著訳書『増訂華英通語』刊行
- 1862 [文久2] 29歳 1月1日、遣欧使節に随行し、長崎より欧州巡遊の旅へ。フランス、イギリス、オランダ、プロシア、ロシア、ポルトガルなどを歴訪
12月10日、品川に到着する
- 1866 [慶應2] 33歳 12月、『西洋事情』初編三巻刊行
- 1867 [慶應3] 34歳 1月23日、横浜より、幕府の軍艦受取委員随員として再度、渡米する
6月26日、帰国、多くの原書を購入してくる
- 1868 [慶應4][明治元] 35歳 4月、築地鉄砲洲から芝新銭座に塾を転居、塾名を年号により慶應義塾に定める(明治改元は9月で、それまでは慶應4年だった)
- 1871 [明治4] 38歳 慶應義塾を三田に移す
- 1872 [明治5] 39歳 2月、『学問のすすめ』初編刊行

Mori



教育熱心な父と 信念を貫く母から受けた影響

まずは森から始めよう。

森は 1847（弘化 4）年 7 月 13 日、現在の鹿児島市で生まれた。父は喜右衛門有^{あり}怨^{ひろ}といい、薩摩島津家に仕える武士であった。母は阿^あ里^{さと}と^とい^いた。父は温厚篤実だが、時に厳しく威厳があり、母は男勝りで気性の激しい、強い精神力の持ち主だった。決断力があり、信念を曲げることを嫌ったこの母の影響を、森は兄弟中で最も強く受けて育った。

森家は豊かとはいえなかったが、父が子どもの教育に非常に熱心で、潤沢とはいえないその資を 5 人の息子たちの教育に注ぎ込んだ。

森は幼名を助五郎といい、森家の末子だった。彼には 4 人の兄がいていずれも秀才だったが、ことごとく早世している。長兄、喜藤太^{ありひで}有^{あり}秀^{ひで}は幕末の戦乱で横死、次兄、喜八郎は病没、三兄は 12 歳で病を得てなくなり、4 歳違いで最も年が近かった四兄の喜三次は、一途な性格から、派閥抗争の絶えない明治国家の前途を憂い、政府批判の文書を集議院（政府の議事諮問機関）の門扉に掲げ、津軽藩邸前で割腹自殺した。こうした優秀な兄たちの早世が森のその後の生き方に大きな影響を与えたことは想像に難くない。

「郷中」で叩き込まれた 武士としての基本

森たち兄弟が最初に属した教育機関は、「郷中」であった。

ある時、曾我兄弟^{あだうち}の仇討^{あだうち}がテーマになった。母親が止めるのを振り切って、殺された父の仇^{かたき}を討つために敵相手を探し回り、17 年後に本懐^{かたき}を遂げた兄弟の話である。森は「国には法があるのだから、いくら親の仇といっても、自分で手を下さ

Column

薩摩藩独自の仕組み、 青少年の教育機関「郷中」とは

薩摩藩では城下の武士たちを居住地に従って方限^{ほうぎり}というものに分割し、その方限ごとに青少年を教育する組織を設けていた。これが郷中である。そこでは、青少年を 6～7 歳から 13～14 歳までの稚^ち児^ごと、14～15 歳から 22～23 歳までの二^に歳^せに^にわ^けた。さらに稚児のうち、11～12 歳以下を小^こ稚^ち児^ご、それ以上を長^お稚^ち児^ごと呼んだ。それぞれ、年長の郷中頭のもとで、学問と武芸の稽古に励んだのである。一説には、この郷中はイギリスで発達したボーイ・スカウトのモデルにもなったと言われている。

小稚児の日課を記すと以下のものであった。朝 6 時の鐘の合図とともに、書物の師匠の自宅を訪ねて素読の指導を受けるところから始まる。その後、帰宅して今度は 8 時から稚児頭の指揮により、相撲、旗取り、大将防ぎ（取っ組み合いの戦争ごっこ）などの遊戯を行い、10 時からは教場でもある長稚児の家で書物の復習や指導を受けた。午後は運動や遊戯をした後、4 時から 6 時まで、稽古場で二歳から武道の指導を受けた。

郷中には構成員（組員）同士が議論を戦わせる「詮議」という場があった。それは武士としてふさわしい考え方や行動をとっているかを常に想定しておき、郷中から外に出た際、いかなる場合においても、武士として落ち度ない行動がとれるよう、日頃から備えておく場であった。

具体的には、「武士が 2 人、刀を抜いて今にも切り合いが始まりそうな場面に出くわしたらどうするか」とか、「無二の親友が果物を持参してきて、2 人で食べたところ、食後にその親友が今の果物は盗品であり、汝も食べて共犯なのだから他言は無用、と持ちかけられた場合どうするか」という状況を設定、その場合の取るべき行動について、上の者が下の者に問いただすのである。武士としてのあるべき行動規範を、具体的かつ身近なケースを用いて体得させる教育方法といえるだろう。

のはよくない」と、他の大勢とは違う意見を吐いた。自分より上の長稚児たちに「お前の意見はおかしい。親の仇を討ってどこが悪い」と言われながらも、頑として考えを曲げなかった。主君の仇を討った義士と賞揚されていた赤穂浪士のことも「国法を破った犯罪人だ」と喝破した。人の意見に付和雷同せず、自分が正しいと思ったことは口に出し、決して曲げないという森の性格はこの頃からあったようだ。

郷中をとともにする組員とは兄弟のような親密な交わりを持つようになるのが常だった。同じ郷中において、森が最も影響を受けた先輩は、12歳年上の五代友厚である。後に実業家、政商として名を馳せ、北海道開拓に際して、官有物払下げ事件の当事者として世間の強い非難を浴びてしまったが、めげずに活動を続け、関西財界の指導的地位にあった人物である。

五代は当時の薩摩藩において才助というあだ名が付けられたほどの秀才で、父親が当時の藩主、島津斉彬なりあきらから預かった世界地図を2枚分、こっそりと模写してしまい、そのうちの1枚をもとに直径60センチほどの地球儀をつくりあげたことがあった。森はこの五代から、日本がいかにちっぽけな存在であるかを何度も聞かされたに違いない。

「造士館」で学んだ儒教と武道

郷中に属しながら、森は1858(安政5)年、12歳の時に薩摩藩の藩校、造士館そうしかんに入る。

藩校とは江戸時代に諸藩が設けた、藩士やその子弟の教育機関で、その総数は255校あったと言われる。その形態や教育内容は藩によってまちまちであったが、そこで教えられたのは基本的に儒学と武道であった。

Column

薩摩藩校「造士館」と名君、島津斉彬

造士館を創設したのは薩摩藩第8代藩主、島津重豪しげひでである。それまで藩内各地で行われていた学問伝授と武道教育を統合する目的で、1722(享保7)年、学問の修行所として造士館を、武道の練習所として演武館を創設した。

生徒の対象年齢は8歳から22歳であり、テキストは四書(論語、孟子、大学、中庸)および五経(易経、書経、詩経、春秋、礼記)といった儒教古典と、和文あるいは漢文で書かれた歴史書であった。

開校と同時に、重豪は次のような学規(教育方針)を示した。

- 一、講書は四書・五経・小学・近思録等の書を用い、
註解は程朱ていしゆの説を主とし、妄みだりに異説を雑へ論ずべからず。読書は経伝より歴史百家の書に至るべし。尤も不正の書を読むべからず。
- 一、専ら礼儀を正しくして学業を勤め、妄りに戯言戯動すべからず。
- 一、疑は互いに問難すべし。専らその言を譲り我意を捨て人に従ふべし。
- 一、古道を論じ古人を議して、当時の事を是非すべからず。
- 一、才学長ずる者あらば誉め進むべし。忌み悪むことあるべからず。
- 一、未々の者たりとも、学文に志厚き者は講義の席に加ふべし。
- 一、入学の輩は字紙を惜しみ、火燭かしよくを慎むべし。

最初の項にある程朱とは、宋の著名な朱子学者3名(程顥ていこう、程頤ていい、朱熹しゆき)の名前であり、彼らの学説以外の解釈は認めないというのである。学問の自由がない、厳しい儒教学校といった趣である。

後に、造士館はその運営方針を巡って、深刻な争いの場となった。朱子学偏重を廃し、実学重視かじへ舵を切ろうとした一派があり、当時は隠居していたものの、相も変わらず藩政の実力者であった重豪の逆鱗に触れ、その動きを仕切っ

た者13名は切腹、25名が遠流、寺入り42名、逼塞23名という厳しい処分が下された。

時代の変化に即応できない藩校のこうした性格を改めたのが、開明的藩主と言われる11代、島津斉彬であった。彼は「造士館演武館の事に関する訓諭」で以下のように述べている。

誠に今日の世は以前よりの儒者流のみの見込にては時態に適せざるなり。弘く宇内に眼を注がざれば、国政をなすこと能はざる場^{あた}に^あ変じ、外国の通信^{ゆる}も允し弘く世界に交通すべき時となりたり。就いては国体を立て彼の長所を探り我短拙を補ひ、武備を厳にし、船舶の便をよくし、外国に乗り出して交はるやうに国威を張るを第一とす。然るときは、自ら皇威万国に輝くべし。かかる目的にて学問を弘くし教えの基を立てんと^あの所有なり

1853(嘉永6)年のペリー来航後、江戸幕府が開国に向けて動き出すなかで、従来の儒者流の思考行動様式では時代に取り残されてしまうと、その転換の必要性を述べている。しかも彼の念頭にあったのは、薩摩一藩のみではなく、日本全体を視野に入れた人材育成であり、まさに名君の呼び名にふさわしいリーダーであった。

斉彬はたびたび造士館を視察し、抜き打ち的な試験も行った。成績優秀者には賞を与え、近習役に抜擢したりした。家が貧しくて学費が払えない者には稽古扶持として米四石を与えるという奨学金制度も創設している。

ただ、森が造士館に入学した年の7月、この斉彬が赤痢のために急死する。藩内は旧藩主の斉興らを中心とした守旧派が再び勢力を盛り返した。

森の目を海外に向けさせた『海国兵談』

森はこの造士館で、川上八郎左衛門という武士から天真流武術を、長兄の喜藤太からは漢学を習った。造士館に入り2年が経った14歳の時、すぐ上の兄、喜三次の義父にあたる向井新兵衛に勧められて、林子平が著した『海国兵談』を手にする。林は仙台藩の兵学者であり、同書はロシア船の南下に際し、日本の沿岸防衛の必要性と具体的な戦術ならびに兵器について書かれた画期的書物だったが、幕府により絶版処分となっていた。この禁書を読破した森は海外事情を学ぶ必要性を痛感、洋学修行を志とする。海外に向かう目を森に与える大きなきっかけとなったのがこの書物であった。

1864(元治元)年6月、薩摩藩が開成所という洋学校をつくった。前年6月に起こった薩英戦争でイギリスに完敗、洋式の軍制整備と軍事力強化の必要性を思い知ったからである。戦争のきっかけとなったのは、藩主、島津忠義の父で、実質的な藩の実権力者、島津久光が江戸から帰国する際、その行列を横切ろうとしたイギリス人4名を無礼であるとして伴の侍が殺傷した、いわゆる生麦事件であった。

薩英戦争時、森の兄、喜藤太も戦闘に参加、その働きが評価され、戦後に褒賞を受けている。森はその兄から、イギリス軍の強さを強く聞かされたに違いない。

森はその年の夏、造士館からこの開成所に勉学の場を移した。

そこで教えられたのは、砲術、兵法、操練、築城といった軍事学が中心だったが、天文、地理、数学、物理、医学などを専攻するコースもあった。生徒は習得する科目ごとに第一等から第三等まで分けられ、給料も支給された。森は第二等だった。教えられた語学は英語とオランダ語であったが、当時は蘭学の全盛期であり、圧倒的にオランダ語

専修生が多かった。

森は少数派の英語専修生だった。森は 1861(文久元)年、弱冠 15 歳の時、3 年年上の英学者、上野景範^{かげのり}の門を叩き、英語を教えてもらっていた。それが、数少ない英語専修生のグループに属することになった要因だった。そのことが森の運命を大きく変えていく。

藩で選抜され、イギリスへ留学

同じ年の 11 月、薩摩藩は幕府に対抗し、多数の留学生の海外派遣を検討し始めた。その建策を行った一人が、森の郷中での先輩、五代友厚であった。五代は薩英戦争の折、西洋文明の実際を知るために自発的に敵の捕虜となる。その行動が藩や幕府の役人に怪しまれることとなり、指名手配となっていた。方々を逃げ回り、ようやく長崎のイギリス商人、トーマス・グラバーの屋敷にかくまわれた。ここでそのグラバーと昵懇になり、国際情勢を事細かに聞き及んだ。五代の建策は、それをもとに、攘夷論を現実性のない盲論として退け、開国による貿易振興策による富国強兵策を説く内容であり、具体策として挙げられたのが、上海貿易振興論と人材養成のための海外留学生派遣策の 2 つであった。薩摩藩当局はこのプランに大きな興味を示した。

留学生派遣が正式に決まったのは 1865(慶應元)年正月のことである。行き先はイギリスである。その目的は、西洋の文化および技術、なかならず海軍学の習得と対英親善であった。

総員はお目付け役の五代ら含め 19 名で、その中の一人に 19 歳の森がいた。五代の推挙もあっただろうが、開成所での真面目な勉強ぶりはもちろん、物おじしない性格も評価の対象であっただろうし、何より数少ない英語専攻だったことが大きかった。森に課せられた使命は、その英語力を生かして、イギリス海軍の測量術と機関術を習得することであり、帰国後は海軍における勤務が目

されていた。当時、幕府によって海外渡航は禁止されていたから、全員分の偽名も用意された。

その年の 3 月 22 日、19 名を乗せた英船オースタライエン号が薩摩の羽鳥沖を出帆、一路、イギリスのサウサンプトンに向かったのだった。

Fukuzawa



「門閥制度は親の仇」が原動力

早くから将来を嘱望され、郷中→造士館→開成所→英国留学と、当時の薩摩藩におけるエリート養成の典型的コースを順調に辿っていった森に対して、福沢諭吉は振れ幅のある、もう少し複雑なキャリアを辿っている。

福沢は 1835(天保 5)年 1 月 10 日、現在の大阪市で生まれた。父、百助は豊前中津藩の下級武士であったが、当時は大坂にある藩の蔵屋敷詰めの身分であった。母は同藩武士の娘で、お順と

いった。百助は中津から大坂に配送される米を抵当にして、三井、鴻池といった大坂の富商から金を借り、藩の財政に融通するという重要な役割を担っていた。いわゆる藩債の発行業務である。ところが百助は生来、学問好きで、こうした「俗事」に携わることには内心、^{しくじ}忸怩たる思いを抱いていた。本の虫でもあり、蔵書家としても知られ、本当は学者になりたかったようである。廉直で一本気な性格で、ある時、福沢の兄や姉が掛け算の九九を習ってきて家で暗唱しているのを聞くと、「幼少の子に金勘定のことを教えるとは何事だ。そんなところに大事な子はやれぬ」と息巻き、子どもたちを連れ帰ったという。

百助は福沢諭吉の誕生をひどく喜び、「これはいい子だ。10 歳になったら、寺に預けて坊主にしよう」と妻、つまり諭吉の母に繰り返して語っていた。その理由をのちに福沢自身が推測している。

足軽の家に生まれたら足軽、家老の家に生まれたら家老、というように、職業と身分がきっちり固定していた当時、わずかに寺の坊主のみは卑賤のものでも、将来、大きく名を上げる可能性が残されていたからだ、というのである。

福沢は奇しくも森と同じく 5 人兄弟の末子だったが、1 歳半の時、この父を亡くしている。45 歳の若さであった。そのため、福沢には父の記憶がほとんどない。

その死はまことに突然だったので、部下の失敗をかぶって自殺したという説もある。後に福沢が「門閥制度は親の仇」と繰り返し述べたのも、身分固定制の中で苦しみ、いくら優秀であっても自分の思うとおりの生き方や仕事のままならなかった父への同情から来ているのかもしれない。

母はやかましい父とは対照的に、さっぱりとした大らかな人柄で、慈悲深い女性でもあった。

学問への目覚めは遅く

地元塾で儒学を徹底的に学ぶ

福沢が読書に目覚めたのは 14、15 歳のころだった。幼くして父を亡くしたため、教育が行き届かず、それまでは「いろは」くらいしか学んでいなかったのだ。

その頃に地元の塾に通うようになり、生まれつきの才能があったのか、漢書の理解に関しては時に先生を凌ぐくらいだった。いくつかの塾を転々としたが、そのうち最も長く 4、5 年通ったのが白石常人という学者の塾であった。そこでもっぱら読まれたのは、論語、孟子、詩経、書経といった儒学の経書である。そこから、蒙求、世説、春秋左伝、戦国策、老子、莊子などについての講義を聴いた。

なかでも没頭して読み込んだ書物が中国・春秋時代の歴史を描いた春秋左伝である。全 15 巻あるうち、3、4 巻目で挫折してしまう学生が多かったが、福沢は通読し、さらに 11 回も読み返し、

興味を惹かれる箇所は暗記していた。

後に儒学を激しく攻撃し、洋学の信奉者となる福沢だが、少年時代にこれだけ儒学を深く学んだことも大きく影響していたに違いない。ある思想の根本的批判は、その中に深く入り込んだ者しかできないからである。

外に出たい！という野心と

一心不乱に学んだ蘭学

福沢の運命が大きく変わったのは、8 歳違いの長兄、三之助により、長崎行きを誘われたことであった。1854（安政元）年 2 月のことで、福沢は 21 歳であった。

その前年の 6 月、アメリカの提督ペリーが黒船 4 隻を率いて神奈川の浦賀沖に来航し、日本に開国を迫るといふ事件が起きていた。その動きは、万が一に備えて、日本中の各藩に砲術習得の必要性を痛感せしめた。砲術を学ぶとなると、当時は鎖国をしていたので、西洋への唯一の窓口だったオランダに頼るしかない。そのためには、オランダ語の原書を読む必要があるというわけだった。

「貴様は原書を読む気はあるか」と尋ねた兄に対して、福沢はこう答えた。

「人の読むものなら横文字でも何でも読みましょう」

福沢はこの時まで原書の何たるかも、横文字の中身も何もわかっていなかった。田舎の中津で一生を暮らすことがいやでたまらず、そこを出る口実があれば何でもよかったようである。

特に遊学費用があったわけでもなく、とにかく長崎では働いて自活するつもりで、所用があった兄と一緒に中津を旅立ち、長崎に入った。同地では中津藩の元家老の息子、奥平壱岐が、同じように砲術研究のために寺に仮住まいしていることを知り、そこに転がり込んだ。

この奥平の世話で、山本物次郎という砲術家の家に食客として住み込む一方、薩摩藩から長崎に

派遣されていた松崎^{ていほ}鼎甫という武士からアルファベットを教わる。26文字を覚えるのに丸々3日もかかったという。それからオランダ語を解する日本人を訪ねては、教授を願い出るなどして、一心不乱に学んだ。

そのうち、同じ洋学を学ぶ仲間たちの間でも一目置かれるほどの実力を蓄えるようになったが、思わぬ裏切りに遭う。福沢の盛名が華々しいのを妬んだ奥平壱岐が元家老の父に「福沢の母が病気だ」と訴え、それを信じた元家老が「母の病を機に中津に帰国すべし」と福沢に命令してきたのである。福沢は自分のいところから、母が病にかかったというのは虚偽であることを知らされていたが、ここで争っても仕方がない、この嫌がらせをきっかけに、かねて行きたかった江戸に行こう、と長崎をあとにした。長崎でのオランダ語修業はちょうど1年で終わった。

適塾、そして緒方洪庵との出会い

ただし、江戸に行くといってもあてがあったわけではない。ちょうど長崎の蘭学仲間江戸から来ていた岡部同直という者がいて、父が日本橋の開業医だという。その岡部に頼み込んで父への紹介状を書いてもらった。

中津へ帰る商人と途中まで一緒だったが、理由を話して諫早で別れ、ひとまず大坂へ向かう。そこには兄の三之助がかつての父と同じ仕事につき、同じ蔵屋敷に住んでいた。

兄に江戸行きを相談するものの、「お前はそもそも中津に帰るはずで長崎を出たのではないか、ここで諾といえ、俺とお前とで母を騙すことになる」と頷いてくれない。蘭学ならば、大坂でもできるはずだ、と兄がわざわざ探してきたのが緒方洪庵の適塾であった。結局、福沢はこの適塾に入門する。1855（安政2）年3月9日のことである。

江戸時代には森が学んだ造士館が武士を対象に

した官立学校であるのに対し、武士以外の人たちにも門戸を開いたのが私塾である。その数を算定することは難しいが、約1000校あったものと推定されている。そこで教えられていたのは儒学諸派から国学、医学、蘭学など非常に幅広かった。私塾は、幕府や藩などの制度によるものではなく、自由に開設されたものであり、藩校や寺子屋と違って身分上の差別も少なく、多くは武士も庶民もともに学んだ。特に幕末の私塾は、近代日本の学校の一つの源流をなしている。

藩校との最大の違いは、私塾においては創設（代表）者の人格および、その人格と不可分の学問に触れるという点である。私塾に学ぶ者と代表者の間には親密な師弟関係が成立するケースが多い。緒方洪庵の適塾は幕末を代表する私塾であった。

Column

緒方洪庵と適塾

緒方洪庵は1810（文化7）年、現在の岡山市に生まれた。福沢より24歳年長である。足守藩に属する藩士の三男である。父である源左衛門が大坂蔵屋敷の留守居役を命じられ、16歳の洪庵とともに大坂に出てきたのが転機となった。同地で最初は文武の修行を志したものの、虚弱だったため思うような修行ができず、西洋医学を奉ずる蘭学医、^{なかてんゆう}中天游の私塾、^{ししさいじやく}思々斎塾に入り、弟子になった。

緒方が適塾を開設したのは1838（天保9）年のことである。当時は医師志望者を集めた医塾という位置付けだったが、ある出来事を契機にその性格が大きく変質する。出来事とは、ペリー来航であった。

緒方がある人へ書いた手紙には、彼はそれを「天下の一大事」とし、自分のような「^{うじ}蛆虫同然」の低い身分の者でもできることがあるはずだと考え、病気を治す医師を育てることを一時取りやめ、書生を教え導き、時代が必要とする西洋学者を育てることを自分の任務にしたい、と

あった。

1854(安政元)年時点で、適塾の塾生は100名を超えていた。入る際の試験はなかったが、身元引受人が必要であった。月謝は不要とされたが、年に数回の節句に塾生が塾側に謝礼を贈ることが多かった。

適塾での代表的な授業カリキュラムは「**輪講**」であった。塾生を8級にわけて、級ごとに月6回の定例日を決める。その定例日には、籤で席順が決められる。首席者が数行の原書を翻訳してその内容を説明すると、次の席の者が質問をして議論を広げる。

このやり方で、全員に行き渡るまで、講義と質問を繰り返す。質問とそれに関する議論に関して、塾頭や塾監などがその勝敗を判定した。勝った者には白丸、負けた者には黒丸、自らの分担箇所を錯誤なく読了し終えた者には白い三角が与えられ、その数を毎月集計、白丸が多い者を上席とし、上席を3カ月維持できた者を上の級に進ませるという仕組みであった。

徹底した実力主義のもと

昼夜分かたず学ぶ日々

適塾の塾生は本当によく勉強した。福沢いわく、病気をして初めて枕がないのに気付いたくらいで、毎夜枕を下に眠ったことがなかった。昼夜分かたず本を読む。眠くなると机の上に突っ伏して束の間の睡眠をとるか、床の間を枕に眠るかして、布団を敷いて枕を置いて眠ることはただの一度もしたことがないと福沢は自伝に記している。これが例外ではなく、塾生皆がそうだったというのである。もちろん一方で、塾生は石部金吉ばかりではなく、遊びの面では相当のやんちゃぶりを発揮したようである。

後に福沢は当時の適塾生の心中を『福翁自伝』でこう吐露している。

西洋日進の書を読むことは日本国中の人に出来な

いことだ。自分たちの仲間に限って斯様なことができる、貧乏をしても難渋をしても、粗衣粗食、一間看る影もない貧書生でありながら、智力思想の活発高尚なることは王侯貴人も眼下に見下すという気位で、ただ六かしければ面白い、苦中有楽、苦即楽という境遇であったと思われる。たとえばこの薬は何に利くか知らぬけれども、自分たちより外にこんな苦い薬を能く呑む者はなかるうという見識で、病の在るところも問わずに、ただ苦ければもっと呑んでやるというくらいの血気であったに違いはない

福沢はそれまで蔵屋敷から通っていたのをやめ、1855年3月に内塾生となり、翌年には塾長となった。ただし、塾長といっても特権が付与されるわけでもなし、難解な原書を会読する際に会頭を務めるくらいのものであった。

福沢はこの適塾に22歳から25歳にいたるまでの3年数カ月在籍した。洪庵とは互いに親しみ、慈しみあう関係となり、洪庵はわが子のように福沢に接し、福沢は洪庵を父のように慕い尊敬した。早くに父を亡くした福沢にとって本当の父親のように感じられたに違いない。

藩お抱えの蘭学士として江戸へ

1858(安政5)年、福沢は所属する中津藩より命じられ、江戸に出て蘭学教授を務めることになった。25歳の時である。初めて蘭学に接したのが1854(安政元)年、それから長崎で1年弱、大坂で4年弱、計丸5年の歳月を蘭学修行に費やしてきた。その名が故郷の中津藩にも知られるようになり、蘭学研究に熱心だった藩の上層部が、他藩の者よりは、自藩の優秀な者を師とするに如くはない、と考えたのだろう。

いったん大坂から中津に帰り、母に別れを告げると一路、江戸へ向かった。江戸に着いたのは1858(安政5)年10月中ごろのことである。早速、築地鉄砲洲の中津藩奥平家の中屋敷内に長屋の一軒家を与えられた。現在の中央区明石町、聖路加

国際病院がある辺りである。ここが福沢を塾頭とした中津藩立の蘭学塾誕生の地であり、同時に慶應義塾大学の源流点でもあった。

蘭学から英学へ潔く転進

かんりんまる 咸臨丸でサンフランシスコへ

さて翌年のことである。福沢は横浜に出かけた。当時の横浜は、ペリーの来航を契機とした日米和親条約に引き続いて締結された安政五か国条約によって、アメリカを筆頭としたオランダ、ロシア、イギリス、フランスの五か国に対して開かれた港になっていた。蘭学を講じるからには、外に向かつて開かれた最先端の地を見しておくべきだ。そこを見物して、自らの語学力を試そうとしたのである。といっても、当時の横浜は外国人が粗末な家に住み、店をちらほら出しているだけであった。

ところが出かけではみたものの、言葉がまるで通じない。向こうの言うこともわからなければ、こちらの言葉も理解されない。店の看板も読めなければ、購入したビンの貼り紙もわからない。オランダ語ではないとしたら、英語かフランス語だろう。それすらも定かではなかったが、当時言われていたことから想像するに、おそらく英語であった。

福沢は江戸に帰ると大いに落胆してしまった。当然だろう、今まで死に物狂いで蘭学、すなわちオランダ語の習得に励んできたところ、それが何の役にも立たなくなる可能性が生じたのだから。

だが、福沢は前を向いた。ここが彼のすごいところだが、一書生に戻り、オランダ語に代わって、英語を一から習得することに決めたのである。26歳の時であった。藩に嘆願し、蘭英対訳の発音記号付きの高価な辞書を買ってもらい、昼夜分かたず、勉強を始めた。

福沢がオランダ語の代わりに英語を学び始めたその頃、幕府は、オランダに注文して建造した咸臨丸という軍艦をアメリカに派遣することを決め

た。日米修好通商条約批准のため、使節をワシントンに送らなければならなかった。その使節らはアメリカが迎えによこしたポータハン号で行くことが決まっていたが、それとは別に使節警護の目的で、幕府所有の軍艦を一隻、同行させようというわけであった。

福沢はこのことを耳に入れると、いてもたってもいられなくなり、一行に加われるよう、各所を奔走した。

一行の司令官に任命された木村摂津守喜毅の姉は、著名な蘭学医の桂川甫周^{ほしゅう}の嫁であった。福沢は桂川とは昵懇であったので、彼を通じて木村と会い、木村の従者の一人という名目で、渡米できることになったのである。

咸臨丸は1860（万延元）年2月4日に品川沖を出帆、太平洋を横断し、2月25日にサンフランシスコに着いた。

こうして、森、福沢ともに、当時の日本にとっては見習うべき超先進国であった欧米を実地に見る機会が与えられたのである。

Mori



文明を取り入れる前にまず 人間の改革を

時代を少し遡ることになるが、森の足跡に戻ろう。

森ら薩摩藩の留学生一行は1865（慶應元）年5月28日の明け方、イギリスのサウサンプトンに到着する。10月には自然、社会、人文の近代諸科学を講じるロンドン大学に入学することになっていた。最初は留学生たちは同じアパートで起居をともにし、後には一般家庭に分散して住み、英語の勉強に精を出した。

森がロンドンにおいて、さまざまな人たちとの交流を通じ、そしてロンドン大学で学びながら実感したのは、まず国際社会が力によって支配され

ているという冷厳な現実であった。その力の源泉は見るところ、工業と貿易であった。にもかかわらず、日本人はその実態を知らず、三百諸藩に分かれ、攘夷か否かを巡って争っている。森にとって当時の日本の様子は、コップの中で嵐が湧き起こっているように思えたのではないか。

そうした日本の混乱を収めるには西洋の軍事や科学技術を取り入れるだけでは不十分であって、前提として人間そのものの改革が必要だ。森はこう悟るに至った。森ら一行は藩の近代化を期して軍事学を修めに来たわけだが、森の思考はいつしか藩という枠組みを超え、日本という国を憂うようになっていた。周回遅れの日本が発展を遂げるためには、西洋近代文明摂取の前に、それをつくり出した人材の育成法を探ることが大切であり、自分はそのために海を渡って来たのだ、と考えるようになっていたのである。

渡英 2 年目の夏、森はもう 1 人の留学生仲間と、大学の夏季休暇を使って、ロシアへの旅行を敢行する。1866（慶應 2）年 8 月のことである。同じ仲間の中では、アメリカやフランスに渡った者もいた。

日本が模範とすべき国は？ まずはロシアを実地検分

なぜロシアだったのか。実はロシアに対しては、森は英米仏ほどの親近感を抱いていなかった。当時、ロシアは日本からも世界に冠たる「強国」と見られていたが、それは寒冷地という地理的条件によって敵の侵入を防いでいるのに過ぎないこと、その強たる所以は、その頃、ロシアが引き起こしたポーランド、スウェーデンおよび日本の対馬における侵略的行為に象徴的なように、国際的同義の欠如にあると考えていた。しかもツァーリ（皇帝）が頂点に君臨し、国民は彼を「神」と崇めている。

対照的なのはアメリカであった。新興国ではあ

るが、政治は民主的で公明正大に行われている。ロシアとの違いは何より他国を侵略した歴史を持たないということであった。

森はロンドンにおいて、国際的同義と民主政体の有無によって国家の優劣を判断し、日本が模範とすべき国を見定めようという認識に至っていた。そのためにまずはロシア、1 年後にはアメリカを実地検分しようと考えたのだ。

果たして、ロシアの実態は森の仮説どおりであった。彼はロシアの第一印象として、専制君主、つまりツァーリの権力の強さをまず実感しつつ、農奴解放令を出すなど、開明的要素も濃かった当時のツァーリ、アレクサンドル二世の政治を善政だとして評価した。その一方で、わが蝦夷地（北海道）まで触手を伸ばそうとするロシアの領土的野心も確認し、約 1 カ月の旅を終え、イギリスに無事、帰国した。

「世界再生」を目指す 神秘宗教家との出会い

ロンドンで留学生仲間と再会した森は、アメリカに行った 2 人の仲間から興味深い話を聞く。彼らはニューヨーク州にあったトーマス＝レイク＝ハリスなる神秘宗教家が主宰する「新生社」といわれたコロニーでひと夏を過ごしたのだ。ここでは厳しい規律のもとで、自己否定を行い、無報酬の激しい肉体労働を通じて、キリスト教の神に近づき、新たな人間を作り上げるための活動が行われていた。西洋文明に大きな信頼を寄せ始めていた森にとってそれは大きな衝撃であった。西洋にあって、西洋の限界＝文明というきれいな“衣”の下に弱肉強食という貪婪な“本性”をもつ一を乗り越えようとする思想と実践、それをハリスとそのコロニーに見たのである。

翌 1867（慶應 3）年 3 月、そのハリスがロンドンにやって来た。パリで行われていた万国博覧会見物の帰途、書籍出版の交渉ごとがあり立ち

寄ったというが、それは名目上の理由で、前年に自分のコロニーを訪れた2人の留学生以外のメンバーにも会い、世界の再生を目指す彼にとって大きな関心事であった「日本再生プログラム」について具体策を検討することが本当の目的だった。雄々しくて雄弁、知性に溢れたカリスマ的人物であったハリスに森は初対面から大いに魅せられた。今度は森をはじめとした6人の留学生たちがアメリカにあるハリスのコロニーに向けて旅立ったのが、その年の7月上旬のことである。

ハリスのコロニーはニューヨークから北へ120キロほど行ったアメニアという町にあった。ここでは農耕、わけても葡萄栽培が無償の労働奉仕として行われていた。私有財産は否定され、ハリスが全財産を掌握していた。

6人はコロニーに着くと、既にいた30人強ほどのアメリカ人メンバーと同じく、さっそく激しい肉体労働に従事した。森は炊事、洗濯、パン焼きなど、厨房関係を任された。森は喜んでそうした労働に従事した。空いている時間は日本でも使えそうな教科書の収集につとめた。後の教育行政者、森の姿がそこにはあった。森にとって家事肉体労働が自分をつくり変えるための活動であったとしたら、そうした知的活動は国家をつくり変えるためのものであった。

「新生社」スピリットを発揮すべく 日本へ帰国

同じ頃、祖国日本では歴史の歯車が大きく動き始めていた。1868（慶應4）年1月3日、王政復古の大号令が発され、徳川による武家政治が終わりを告げ、天皇親政の世になったのである。明治維新である。この驚天動地のニュースを耳にした留学生たちは動揺した。人間改良による漸進的な日本再生計画をハリスが練っていたところ、そうではない上からの根本改革が成ってしまったのだから。

日米もし戦えば、という議論が留学生の間で巻き起こった。中立で見守る、日本に味方してアメリカと戦うなど、議論が百出。ハリスに意見を求めたところ、「国家のためではなく、神の名において正義のために戦うべきだ」という答えが返ってきた。王政復古により国家意識に目覚めていた留学生らはこれに納得できず、一部がコロニーから去った。森は去らなかった。ハリスの教えを純粹に信じていたからだ。残ったのは森をはじめとした4人だった。が、ハリスが森ともう1人に帰国命令を出す。これまでに身につけた新生社スピリットを日本で発揮したほうが彼らのためにもなる、と考えたのだろうか。兩名ともその命令を受け入れた。森らがアメリカに残留していた同志7名にあてた告別の一書はこうであった（原文は英文）。

知識も乏しく、その上、今日の祖国の情勢について全く何も知らないわれわれであることは、充分承知している。言うに足るほどの寄与をなしうる見通しはほとんどないが、われわれは帰り、そして動乱と暗黒の真ただ中に身を投じることを決意した。それは、われわれがそうすべきだと感じたからである。王国の回復されるための最も小さな犠牲にでもなれば、われわれは非常に嬉しく、また充分満足である

森らが帰国したのは1868（慶應4）年6月のことである。22歳であった。森の研究者、I.P. ホールは3年間にわたった森の留学を次のように意味づけている。

1年目は正しく、合理的にかつ人道にかなって組織された繁栄した近代社会の理想像を森にもたらした。2年目はとくに世界政治をよりリアリスティックに見る力をもたらした。そして3年目は傾向としてきわめて道徳主義的な公私の問題への手がかりをもたらした

もう少し噛み砕いて言えば、1年目は彼我と比べた社会のありよう、2年目はその上にある国際政治へと関心が移り、最後には人間そのものの改

革という最も深遠な問題へと興味関心を移していったのである。

Fukuzawa



維新前後に 三度の洋行を果たす

一方、サンフランシスコに着いた福沢のほうは 50 日あまりと滞在期間も限られ、現地の大学に入ったわけでもないの、森ほどのダイナミックな体験はしていない。年齢が 27 歳と、森に比べ、9 歳年上だったことが影響しているかもしれない。

ただ、アメリカ人と会話し、高層家屋やガス灯が立ち並ぶ街の風景をはじめ、書物でのみ知っていた西洋の文物に直に接したことは、机上の学問を実学に転じさせるまたとない機会だった。

が、福沢にとっては、見ればわかる、そうした文物よりも、目に見えない社会の仕組みのほうが複雑怪奇であった。初代大統領ワシントンの子孫といえ、大変な権勢家だと想像したが、あにはからんや、そんなことはないようだ。政治の仕組みも経済の仕組みも日本とは大きく違うようであった。

結局、アメリカ滞在 2 カ月足らずで帰国の途に着いた。サンフランシスコを発ったのが 1860 (万延元) 年 3 月 19 日、浦賀に戻ってきたのが 5 月 5 日であった。持ち帰った大切な土産品がウェブスターの辞書であった。

福沢は帰国すると幕府の外国方 (今の外務省) に雇われ、翻訳の仕事に就き、それがまた自身の英語力を亢進させることにつながった。

これを含め、明治維新が起こるまでの 10 年足らずの間に、福沢は三度も洋行の機会を得た。二度目は日本政府の遣欧使節に同行しての欧州行きであり、フランス、イギリス、オランダ、プロシア、ロシア、ポルトガルを歴訪する 1 年がかり

の大旅行であった。福沢は幕府の役人としてこれに随行した。1862 (文久 2) 年元旦に長崎を発ち、地球を周回して品川に戻ったのがその年の 12 月 10 日であった。

三度目、幕府の軍艦受取委員の随員として再びアメリカに向かった。1867 (慶應 3) 年 1 月 23 日のことだ。大政奉還をその年の 10 月に控えたその時期、幕府の命運は風前の灯となっていた。福沢もそれまでは何とか幕府を盛り立てようとしていたが、頼りないことこのうえない。半ば匙を投げ、諦めていたその時期になぜ幕府の船に乗りアメリカに向かったのか。実は福沢にはたくらみがあった。幕府が倒れた後、自分の期する文明国家をこの国につくり上げる必要がある。そのため鍵となるのは洋学、なかんずく英学だ。それを今以上に盛んにするために、アメリカに行きがてら、大量の英書購入を画策していたのである。

大金を算段して持参し、果たしてそのとおり実行したところ、アメリカ版の洋書の量が増え、洋書の相場を大きく狂わせた。それどころか、役人という身分で渡航したにもかかわらず、公務そっちのけで大量の書籍を購入するといった行動などが問題視され、帰国後、幕府から訴えられ、福沢は謹慎を命じられてしまったのである。

Mori & Fukuzawa



森は官へ、福沢は民へ 対照的な 2 人のキャリア

さて、森有礼と福沢諭吉、2 人を後世のわれわれが把握しているような社会リーダーにあらしめた前半期のキャリアを振り返ってきた。2 人とも幕末に欧米に留学または遊学、その途上または直後に明治維新が起こり、キャリアが大きく変化していくところが共通している。

森はそれから、政府高官としての道を歩む。すなわち、帰国後に新政府に召し抱えられ、徴士外

国官権判事となる。22歳という年齢にしては分不相応の身分であり待遇であった。以後、公議所（形式的ではあったが、日本最初の議会）議長心得、米国在勤の少弁務使（日本最初の外交官！）、清国駐在の特命全権公使、英国駐在の同じく特命全権公使を歴任する。

福沢は維新前は幕府にも薩長側にもつかず、いわば傍観者の立場にあった。先の謹慎が解け、日を決めて登城はしていたものの、幕府上層部が役目を与えようとすると、病氣と称し断った。福沢にとって幕府、薩長ともに攘夷を奉じるという点では同じ穴の貉^{むじな}であって、西洋文明とそれが生み出した文物の価値を頭でも肌でも実感していた彼にとって、どちらに与するわけにもいかなかったのである。

維新後も、福沢は官になることを拒否し、著述と教育を通じた一般人の啓蒙活動に徹した。

著述の最初の成果が『西洋事情』という書物である。西洋の政治や経済、制度、風俗、文明を解説した同書は1866（慶應2）年から1870（明治3）年にかけて刊行され、ベストセラーとなった。1872（明治5）年から1876（明治9）年にかけて上梓された『学問のすずめ』は人間の平等と独立自尊の大切さを説き、「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」という言葉とともに有名になり、総発行部数70万部に達した。

後者の教育ということでは、何といても慶應義塾である。築地に外国人居留地が設けられるため、立ち退きを命じられ、築地鉄砲洲にあった蘭学塾を芝新銭座に移したのが1868（慶應4）年4月のことであり、年号の慶應にちなみ、塾の名称が正式に慶應義塾と定まる。移転が終わって間もなく、上野の山に立てこもった幕府軍に官軍の総攻撃が行われた日、ドーンという砲声が教室に響き渡りながらも、福沢は気にすることなく、アメリカ人のウェーランドが書いた経済書を原書講読する、いつもの授業を続けた。世間がいくら混乱しようが、慶應義塾は一日も休まず、洋学を君

たちに教え続ける。わが塾ある限り、日本は世界の文明国であると、塾生たちを鼓舞した話は有名である。

慶應義塾の評判は年々高まり、塾生の数は鰻上りに増えた。さすがに校地が手狭になって、芝新銭座から三田に移転、現在の基盤を確立したのは1871（明治4）年3月のことであった。

福沢はその自伝の中で、こう述べている。東洋の儒教主義と西洋の文明主義を比較すると、東洋には有形において数理学、無形において独立心の2つが欠如している。だからその2つを教え込む学校をつくろうと。

数理学とは数学・物理学であるが、1870（明治3）年に出された『慶應義塾学校之説』によると、塾生が学ぶべき洋学の順序は、地理書、数学、窮理学（西洋物理学）、歴史、修心学、経済学、法律書だとある。確かに数理学が重視されていることがわかる。

これが慶應義塾のミッション（使命）だとすると、ビジョン（目的）も明文化されている。以下のように福沢は『慶應義塾の目的』という書を残している。

慶應義塾は単に一所の学塾として自から甘んずるを得ず。其の目的は我日本国中に於ける気品の泉源、智徳の模範たらんことを期し、之を實際にしては居家、処世、立国の本旨を明にして之を口に言ふのみならず、躬行実践、以て全社会の先導者たらんことを欲するものなり

学者像をめぐる2人の意見の相違

福沢と森には実は接点があった。その接点とは明六社であった。米国弁務使を自ら辞して帰国した森が欧米式の学会を日本でもつくろうとして発案した、日本最初の啓蒙結社である。1873年、すなわち明治6年につくられたので、明六社と名付けられた。

森の誘いに応じた当代随一の知識人の一人に福

沢がいた。以来、毎月 1 日と 16 日の 2 回、築地の西洋料理店、精養軒にて会合がもたれることとなる。

それで親しくなったか、1875（明治 8）年 2 月 6 日に行われた森の結婚式では福沢が証人をつとめた。森は当時 29 歳、福沢 41 歳であった。当時としては実に斬新な洋風結婚式であった。新郎新婦は 2 人とも洋装である。あらかじめ、森と妻である広瀬常の合意で作成された婚姻契約書が読み上げられ、両者および証人たる福沢がそれぞれ署名して式が終わり、後は別室で立食による歓談という流れであった。その場には親族、友人のみならず、新聞記者も多数呼ばれていた。

森は、男女は平等、夫婦は対等であり、結婚も契約の一種だというアメリカ流を日本で再現し、広めたかったのだ。森は後に、日本語廃止論まで唱えるほどの欧化主義者であったが、その主張は過激すぎて当時の日本社会は受け入れるどころではなかった。

『明六雑誌』という機関誌も発行された。その第 2 号に「学者職分論の評」と題した森の原稿が掲載されている。「学者職分論」とはその年の 1 月に出た福沢の著『学問のすすめ』に掲載されていた「学者の職分を論ず」を意味し、森の原稿はそれに対する批判となっている。すなわち、福沢が人民と政府、民と官を厳然と区別し、学者は政府とは別の立場で国家のための事業を行うべきだと論じたことに反論、国民という意味では官僚も民に他ならず、二分論は意味がないと主張。福沢の論どおりにすると、学ぶ意欲のない中途半端な人材のみが政府に居座ることになると述べている。国家のために粉骨砕身、努力する学者も必要だ、という立場だ。

Mori



政策その 1

— 帝国大学令の発布

この主張が形になったと思われるのが、後に森が伊藤博文内閣における初代文部大臣に就任後に発した「帝国大学令」である。1886（明治 19）年 3 月 2 日のことである。これによって、既にあった東京大学が帝国大学となり、日本の最高学府としての地位を占めることになった。

東京大学はもともと幕府の学問機関であった蕃書調所と、同じく幕府の医学所であった種痘所という 2 つの機関が名称と体制を変えた学校を、1 つに統合したものである。蕃書調所は洋書調所、開成所、開成学校、大学南校、開成学校、東京開成学校などと名称を変え、一方の種痘所の名称および組織も医学所、医学校兼病院、大学東校、東京医学校などと変わり、その 2 つが統合され、東京大学が設立されたのが 1877（明治 10）年 4 月のことであった。先の帝国大学令により、従来の東京大学は法科、医科、工科、文科、理科、農科という 6 つの分科大学で構成される総合大学となったのである（1897 年には東京帝国大学と改称）。

帝国大学令の第一条は、帝国大学の目的をこう記す。

帝国大学ハ国家ノ須要ニ応スル學術技芸ヲ教授シ
及其蘊奥ヲ攻究スルヲ以テ目的トス

ここに、帝国大学は国家が必要とするところの学問や技術を教え、その極意を極めるための場であると説明したのである。

この理念は、後の東京帝国大学を含む帝国大学は、社会のリーダーの中でも官僚育成に力を入れるということに帰着した。

それはまずこんなところに表れた。すなわち、1887（明治 20）年に試験を通じた官僚登用制度が創設されたのだが、帝国大学を卒業した学生はこの試験を受験せずとも官僚になることが可能と

なっていた。6つの分科大学のうち、最も定員が多かったのが法科大学であり、その卒業生の多くが官僚となっていった。しかも、6分科大学のうち、法科大学が最も権威があった。なぜかといえば、その学長は他の5分科大学と違い帝国大学の総長が兼任する仕組みになっていたからだ。こんなところに、初期の東大の社会的意味が表れている。

1889（明治22）年7月には時の首相、黒田清隆の名前で、法科大学卒業生の成績を官僚になった際の最初の給料に直結させるべし、という内訓が出された。具体的には、点数85点以上が年俸600円、80点以上が550円、79点以下が500円、70点以下が450円とある。ジャーナリストであった徳富蘇峰は、この内訓を大学がその本質を忘れ、ただの官吏養成所になってしまう、として痛烈に批判した。

政策その2

— 学歴進路の整備と教員の教育

森は先の帝国大学令とともに、中学校令、小学校令、師範学校令も発布した。明治以後の日本の教育制度の最初の枠組みをつくったのが森であった。

中学校令においては、中学校を尋常中学校と高等中学校に分け、前者を府または県立の5年制に、後者を官立の2年制とした（1894年に出された「高等学校令」により、高等中学校は3年制の高等学校となる）。

小学校令では小学校の時期を8年間とし、最初の4年間を尋常小学校として義務教育化、次の4年間を希望者のみの高等小学校とした。どちらも授業料を必要とした。国民全員に最低限の教育を提供するのが小学校令の目的であったため、森はこの2つとは別個に無償の簡易科なる小学校を設け、貧しい家庭の子弟でも学校に通えるようにした。

こうして森は、尋常小学校→高等小学校→尋常中学校→高等中学校→帝国大学という学歴進路を整備、定着せしめようとしたのである。

そうやって学校の“器”だけを整えても、肝心の教員の質が悪かったら、教育の成果は上がらない。そこで、森は師範学校制度の構築にも意を尽くした。師範教育で重視されたのは、「順良、信愛、威重」であり、これが指導精神となった。森は、教員は「教育の僧侶たれ」と説いた。教員を公務員の一職業ではなく、「聖職者」とみなしたのである。

師範学校令によれば、文部省直轄の高等師範学校を東京に設立し、各地の師範学校教員の養成機関とするとともに、府または県立の尋常師範学校を設け、その卒業生は小学校の教員になった。この尋常師範学校の学費は無料であった。その代わりに卒業後は必ず教員にならなければならなかった。結果、家は貧しいが勉強好きで優秀な少年が多数教員の道に入った。戦前の日本の学校教員は優秀だった。それは森が整備したこの制度のおかげともいえる。

政策その3

— 自由な経済競争と 近代的商業人の育成

もうひとつ、新たな社会リーダー輩出のために森が先鞭をつけた仕組みがある。1873（明治6）年、つまり明六社誕生と同じ年の10月、森が東京府に開設を願い出た「商法講習所」がそれである。森はアメリカ駐在時に商業教育の必要性を痛感、これからの日本には自由な経済競争とその主人公たる近代的な商業人の育成が不可欠だと考えるに至った。

東京府知事の久保一翁、東京商法会議所会頭の渋沢栄一の尽力でようやく認可が下り、1875（明治8）年9月24日によりやく開校した。専用の校舎がなかったため、銀座尾張町の鯛味噌屋

の2階が仮の教室だった。生徒数は30名不足だったが、日本で最初の実業学校の誕生である。これが後に東京商業学校、そして東京商科大学、さらに一橋大学となった。その一橋大学が事実上の校是として掲げるのが、19世紀イギリスの思想家にして歴史家、トーマス・カーライルの著作『過去と現在』から採られた「キャプテンズ・オブ・インダストリー (Captains of Industry)」、国際的に通用する産業界のリーダーたり得る人材の育成である。一橋大学が創設当初より掲げている使命の源流は、森の手によって生まれているのだ。

Mori & Fukuzawa



森による上からの教化は挫折 それを補ったのが福沢か

森は1889(明治22)年2月11日、大日本帝国憲法発布の当日朝、官邸において、西野なる一國粹主義者によって腹部を刺され、その傷がもとで翌日死去する。享年42であった。その前々年の1887(明治20)年11月、森が伊勢神宮を参拝した際、土足のままで昇殿した、御帳をステッキであげて中を覗いたという根も葉もないデマが世間を賑わせており、西野がそれを盲信したうえでの凶行であった。

この凶行後、森に対する同情よりも、西野に対するそのほうが強く、マスコミの中心たる諸新聞は「天下の志士」として西野を遇し、それがために谷中に設けられた彼の墓には弔問者が絶えなかった。真の意味で自立した近代的な国民を育てようとした森の志は、東洋初の憲法発布日という皮肉な日を境に、潰れてしまったのである。上からの政策だけでは、その志を完遂することはできなかったのだ。

福沢は自らの主宰する新聞『時事新報』に次のような弔辞を載せてその死を悼んだ。

大臣は少年の時より西洋主義の教育を受け、近代

改進黨の一人と呼ばれ又自らも任じたる人物にして、平生の言行^{すべ}都て文明の流儀なるは無論、これに加ふるに天性剛毅率直の氣に富み、敢て他を憚らざるの風なれば、古流古主義の眼を以て之を見るときは、其言行、時としては不愉快なることもある可し。(中略)今更言ふて甲斐なきことなれども此西野なる者が偶然の縁を以て兼て森大臣の家に入出し、親しく大臣の言を聞き又その挙動を目撃することを得たらんには、^{わずか}僅に数週間の交際にて談笑の間に互いに心事を解して、暗殺などの念を寄せざるは無論、^{たと}假令へ既に其念あるも^{たちま}忽ち消散して自ら悔悟す可きや万々疑ある可らず

福沢のつくった慶應義塾はその翌年、大学部を内部に設け、文学・理財・法律の三科で構成される日本で最初の私立総合大学となった。そして以後、各界に多士済々を輩出していく。さらに福沢は『学問のすすめ』をはじめとした著作を数多くものし、森とは対照的な下からの国民教化を着々と成し遂げた。

その福沢が脳出血を起こし、自邸で67歳の生涯を終えたのは20世紀最初の年である1901(明治34)年の2月3日で、凶行に倒れた森とは違い、畳の上で生涯を閉じた。大観院独立自尊居士、これが法名であった。

[参考・引用文献]

- 犬塚孝明『森有礼』吉川弘文館、1986
- 井上勝也『国家と教育—森有礼と新島襄の比較研究—』晃洋書房、2000
- 林竹二『森有礼 悲劇への序章』筑摩書房、1986
- 安藤保『郷中教育と薩摩士風の研究』南方新社、2013
- 奈良本辰也 編『日本の藩校』淡交社、1970
- 沖田行司『藩校・私塾の思想と教育』日本武道館、2011
- 会田倉吉『福沢諭吉』吉川弘文館、1974
- 福沢諭吉『福翁自伝』岩波文庫、1978
- 山室信一・中野目徹 校注『明六雑誌(上)』岩波文庫、1999
- 立花隆『天皇と東大(上)』文藝春秋、2005
- 橋本俊詔『東京大学 エリート養成機関の盛衰』岩波書店、2009
- 『別冊太陽 慶應義塾百年』平凡社、1980

TEXT = 荻野進介